

「都民の森」の散策：9-1 会の活動報告(2017/5/19)

(記) TI

隔月毎の活動とした 9-1 会（第 9 期 1 班）の第 2 回目として、5 月 19 日（金）に東京都西多摩郡檜原村（ひのはらむら）にある「都民の森」に出かけました。暑くも寒くもない絶好日で、全員 7 名が 2 台の車に分乗し、往路は奥多摩湖より奥多摩周遊道路経由、一方、帰路は五日市街道経由のドライブです。

「都民の森」は、奥多摩の最高峰である三頭山（みとうさん：標高 1,531m）の中腹に位置し、初心者から健脚の方までバリエーション豊富なハイキングコースが整備されています。入り口駐車場から 5 分足らずで「森林館」に付きました（標高：約 1,000m）。「森林館」は、「都民の森」を楽しむための拠点であり、館内には休憩室、レストランがあります。館横に、丸い♡形の新緑葉を持つカツラの高い木がありました。今回の企画を担当した YA さんが、「秋には黄色くなって落葉し、その葉には甘い香りがある」と教えてくれる。秋に、再度、来る必要がありそうです。



別の場所にあった小さな「カツラ」の木の葉：丸い♡形が特徴

全てのコースが「森林館」からスタートしており、私たちは、“お年寄りや小さなお子様連れの方にも安心してご利用いただける”という「三頭大滝コース：全長約 1km」を選びました。東京都内で初めて森林セラピーロードに認定されたコースだそうです。ウッドチップが敷き詰められており快適な散策路です。コースは針葉樹や広葉樹の大自然に囲まれており、野鳥の鳴き声を聞き、たくさんの山の花を愛でながらゆったりと進みました。ゴールの三頭大滝は、萌えた新緑の中それ専用の滝見橋（延長 54.5m の吊り橋；谷底から高さ約 25m）から正面に見ることができます。水は、岩を滑り落ちるように落差約 33m を流れ落ちていました。大滝の近くの休憩小屋で、お弁当を食べコーヒを頂きました。



「三頭大滝」観覧専用の滝見橋に立つ：橋の向こう端は行き止まり



白地に赤い縞模様が入る更紗満天星（サラサドウダン）

YAさんは山の花などにも詳しく、まさしく「花図鑑」先生でした。しかし、生徒の方は「三步で忘れる」、「記憶の引出しが10個しかない」、「記憶はできるが思い出すのが難しい」とのたまう輩です。そのくせ、先生から「これが『ドウダンツツジ』です」と教えられると、「その『ドウダン』はどんな漢字ですか？」と問い、先生を困らせます。列後尾でスマホをいじった生徒が「『満天星』ですよ」と声を上げる。思い出そうとじっと固まっていた先生が、「確か『灯台……』では？」と返す。すかさず別の生徒が、「その漢字のいわれは何ですか？」とさらに問う。

私たちは、長時間の記憶力は別として、少なくとも知的好奇心が未だ旺盛な高齢者であることを再確認しました。萌えた新緑を浴び、滝の姿を眺め、花を愛で、ウグイスの鳴き声を聴き、仲間と語り、記憶脳を刺激し、大いに楽しく癒された一日を過ごしました。

自宅に帰って調べてみました。『ドウダンツツジ』の花色には、白のほかに白地に赤い縞模様が入る更紗（さらさ）ドウダンや赤い花を咲かせる紅花（べにばな）ドウダンなどがあります。『ドウダンツツジ』は、漢字で『灯台躑躅』と表記されます。「灯台（ドウダン）」は、枝分かれしている様子が昔夜間の明かりに用いた灯台（結び灯台）の脚部と似通っており、その「トウダイ」から転じたとのこと。

また、『ドウダン』は漢字で『満天星』とも書かれ、俳句では春の季語になっています。「満点星」と書くのは、中国の故事によるのとか。昔、太上老君（だじょうろうくん、道教の始祖・老子が神格化）が仙宮で霊薬を練るうち、誤ってこぼした玉盤の霊水がこの木に散って壺状になり、満点に星が輝くように美しかったという伝説によるのだそうです。白い花色の『ドウダンツツジ』なら同意できますね。

『躑躅』は「ツツジ」と読むのですが難読です。「薔薇」はバラ、「葡萄」はブドウ、「菖蒲」はアヤメといかにむずかしい漢字でも、「草かんむり」が付いていれば、草花の名前であることはわかります。しかし「躑躅」には、「草かんむり」が無いのです。この「躑躅」は、「テキチョク」とも読まれ、「行っては止まる、行きつ戻りつする」「躊躇」の意味があります。見る人の足を引き留める美しさから、「ツツジ」にこの漢字が使われたとの説があります。また、本来は、「羊躑躅」で葉を食べたヒツジが「躑躅」して死んだことからの説もあるそうです。